

滑川市まちづくり共創会議
報告書（案）

令和 6 年 1 月

滑川市まちづくり共創会議

目次

はじめに	2
I 滑川市の将来ビジョン	3
II 取り組むべき政策	
1 地域資源の活用・ブランディング	6
2 まちづくりと交流・関係人口の拡大	9
3 農林水産業、商工業、創業支援	15
4 子育て支援と教育・人材育成	19
5 DXの推進	25
III 今後の取り組み	28
(参考) 滑川市まちづくり共創会議	29

はじめに

- ・ 今、滑川市のみならず、我が国においては、少子高齢化、人口減少が進んでおり、経済規模の縮小や、高齢者の増加に伴う社会保障費の増大といった社会課題が顕著になっている。
- ・ こうした中、新型コロナウイルスの感染拡大により、産業経済に大きな影響が生じている一方で、テレワークなどリモートサービスの活用が進み、DX など社会変革に向けた取り組みが加速している。
- ・ このように変化が早く、不確実性の高い経済社会、いわゆる VUCA（ブーカ）の時代と言われる経済社会においては、行政がトップダウンで決めた計画に従って動くことで成果が発揮しにくくなってきている。常に変化し続ける現場の実情やニーズは、行政ではなく、むしろ市民や企業が把握している場合の方が多い。市役所は、市民、企業と開かれた対話を行いながら、状況変化に応じ、最適な対応を検討し、実行していくことが求められている。
- ・ このため、新しい滑川の実現に向け、意欲のある市民、企業の皆さんと対話を重ね、共に考え創る場として、滑川市まちづくり共創会議を設置し議論を重ねてきたところである。
- ・ 報告書（案）は、この共創会議で出た意見をベースに、**市民セッションや職員セッションを実施し、そこで出た意見を取り込み、新しい滑川の方角性としてまとめたものである。**今後、さらに市民の皆さんとの対話を重ね、市民の皆さんがワクワクする滑川を創造していきたい。

I 滑川市の将来ビジョン

(1) 将来ビジョン

私たちの暮らしにとって、経済成長は必要であり、最低限のお金がないと充実した生活ができない。しかしながら、市民の皆さんは、こうした経済のみならず、精神的にも、社会的にも充実した「幸せ」を求め始めているのではないか。

こうした中、富山県では、目指すべきビジョンとして、主観的な要素も含めた総合的な幸福度である、「ウエルビーイング」を掲げ、政策を推進している。

滑川市は、この自然豊かな富山県の中にあって、ひととき海や山からの景観が素晴らしい地域である。また、歴史・文化を見ても、旧北陸街道の宿場町には、大名はもとより松尾芭蕉が宿泊したことでも知られる、国登録文化財も多数存在している。これらの滑川市の自然や文化の魅力は、多くの企業が立地し経済的にも恵まれている環境下にあって、市民に癒し・やすらぎを与え、市民の「幸福度」を高めている。

こうしたことから、滑川市の目指すべきビジョンについては、富山県が目指す「ウエルビーイング」と軌を一にしつつ、市民を第一に考える観点から、市民の皆さんの思いを前面に押し出すことが大事である。このため、自然や文化の魅力にあふれる滑川において、幸福感に満ちた市民の皆さんの思いを素直にわかりやすく表現するとともに、**滑川市の特徴、魅力を表す言葉を入れ**、「幸せいっぱい 笑顔がいっぱい **光り輝く** 滑川」としたい。

【滑川市の将来ビジョン】

幸せいっぱい 笑顔がいっぱい 光り輝く 滑川

上記「滑川市の将来ビジョン」の各々の文言について、どういう意味か、具体的に何を目指すのか、滑川らしさの意味は含まれているのかについて、次の通り示したい。

○幸せいっぱい

- ・自分自身が健康であることは「幸せ」の大きな要素である。
- ・更に、滑川市には売薬の精神が根付いており、江戸時代から続く売薬が全国各地に健康（幸せ）を届けたように、滑川市に関わる人全てに「幸せ」を届けていきたい。
- ・また、滑川市は、雄大な立山連峰・劔岳など素敵な自然景観に恵まれた地域で、市民が「幸せ」を感じ暮らしている。
- ・加えて、製造業などの産業発展、空港・新幹線等へのアクセスなど交通の利便性、子育て世代への支援充実など、安全・安心で快適な暮らしができる町であり、多くの転入者で人口が社会増となっている。
- ・将来に向け、新しい人たちを受け入れながら、共に新しいまちの暮らしやすさを創っていくまちとして、「幸せ」を広げていきたい。

○笑顔がいっぱい

- ・「笑顔」は、薬を売りながら全国を回った売薬の精神に根付くものであり、人と人の交流、相談、コミュニケーションは、その大きな要素である。
- ・江戸時代から続く旧北陸街道の宿場町では、市民が文化財である建築物の修復保存を進め賑わい創出の場づくりに取り組むとともに、Eスポーツのプロチームなど若い世代の起業家が空き店舗を活用し、多くの出店が続いている。こうした起業家の交流する場が自然発生的に創り出され、チャレンジすることを認め合う仲間たちが、「笑顔」で交流している。
- ・また、子育て応援宣言を行っている滑川市では、子育てのほか介護、生活に関する相談ができる「暮らしの保健室」など、市民の「笑顔」のための相談の場も設けている。
- ・将来に向け、更に新しい可能性や多様な人と出会える場を増やし、そうした人たちの違いを生かしたイノベーションを創出し、市民の「笑顔」を増やしていきたい。

○光り輝く

- ・滑川市は、青空に映える立山連峰の雄大な姿、雪化粧の立山連峰をピンクに染める夕日の輝き、県内随一の夜景が見える山沿いの台地、全国トップクラスの急流河川の煌めき、真っ赤な夕日が沈む海岸、ホタルイカの幻想的な青白い光など、海・山の景観の「輝き」がひととき美しい。
- ・また、文化面でも、ねぶた流しの勇壮な炎、ランタン祭の提灯の灯り、県内最大3尺玉のふるさと龍宮まつり、数々の光と灯りのイベント。滑川市は、「光り輝く」まちとして特徴づけられる。
- ・加えて、全国でも稀な北欧教育を取り入れた「なめりかわ未来学校」や地域の未来を話し合う「子どもサミット」など、将来に向け、子供たちが持つ無限大の可能性を引き出す教育を行うことで、「光り輝く」次世代の育成に繋げていきたい。

（２）滑川市の政策推進の柱

この将来ビジョンの達成を目指し、滑川市では、様々な政策を実行していくこととなるが、将来ビジョンは、その政策の是非を判断するための基準となる。このため、将来ビジョン達成に向けて、効果的な政策を推進していくことが重要である。

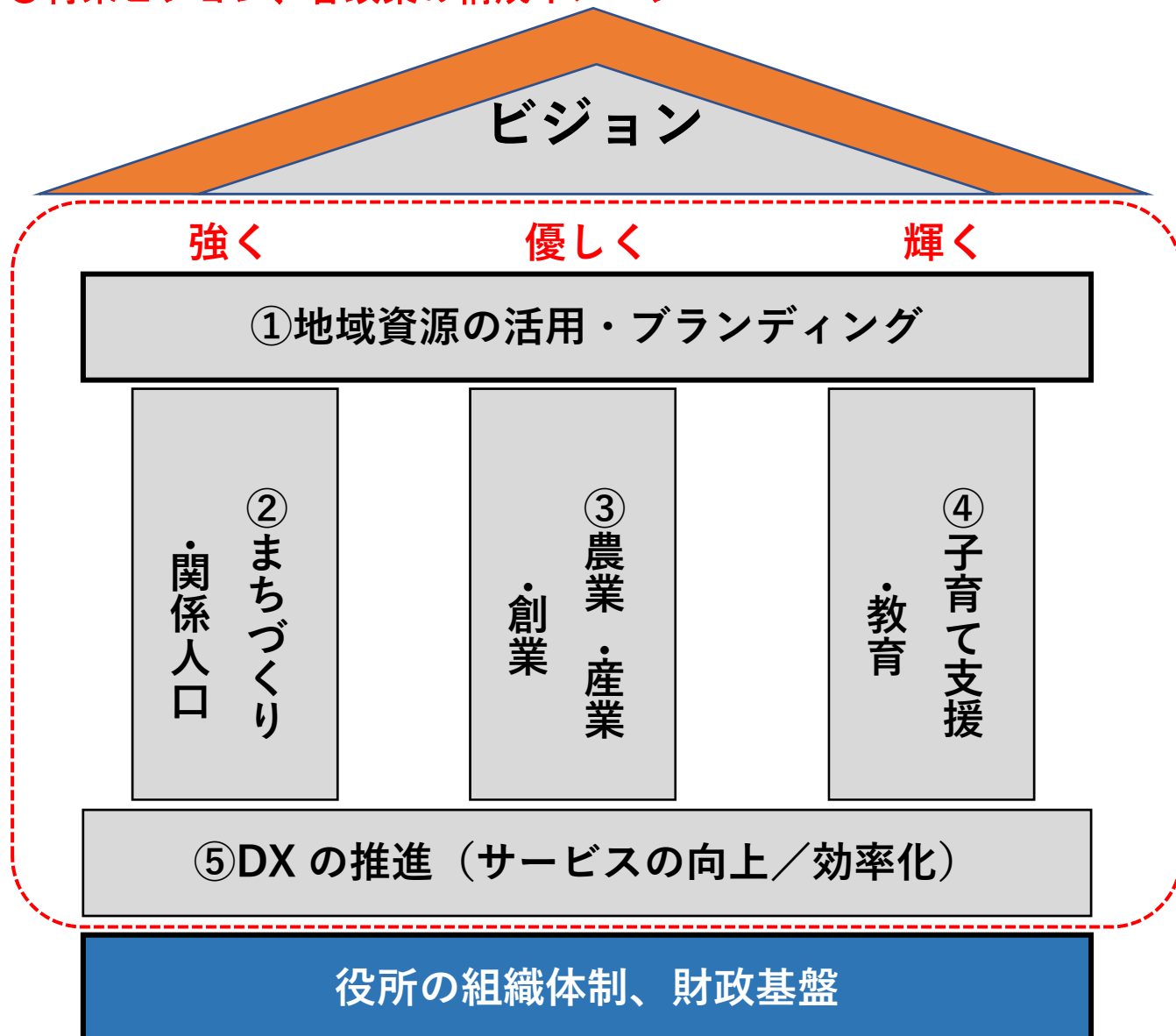
政策の推進にあたっては、産業や災害に「強く」、子育て・福祉など市民に「優しく」、教育や自然・文化の魅力を将来に向け「輝く」、滑川市を創造していく。

これを端的に言うと、「強く優しく輝く滑川」を全力を挙げて取り組んでいきたい。

【滑川市の政策推進の柱】

強く　優しく　輝く　滑川

○将来ビジョン、各政策の構成イメージ



将来ビジョンと政策推進の柱、各政策の構成は上記のイメージのように建物に例えられる。

滑川市の将来ビジョン（目指すべき姿）」は、市民及び市役所職員の目指すべきビジョンであり、政策の判断基準となる。また外部に対する市のイメージを伝えるものである。家に例えると天井または屋根の部分にあたる。

次に、「地域資源の活用・ブランディング」は、市の魅力を外部に知ってもらうものであり、市の政策全てに関わってくることから、一番上に位置付けた。

次に、「まちづくり・関係人口」、「農業・産業・創業」、「子育て支援・教育」については、ビジョン達成に向けての政策となり、将来ビジョンである屋根を支える柱の部分になる。

最後に、「DXの推進」は、デジタルの活用によるサービスの向上、効率化を促進させるための手段であり、すべての政策に関連することから、建物の土台の部分になる。

「将来ビジョン」の達成に向け、一番下部に表記した「役所の組織体制、財政基盤」のもと、手段である「政策」の実行と検証を進めることで、市民の行政ニーズに対応していくことを示したものである。

II 取り組むべき政策

1 地域資源の活用・ブランディング

目指すべき姿

- ・ホタルイカ、海洋深層水など地域資源を磨き上げるとともに、それらの魅力が効果的に発信されていることにより、市内外から多くの人が集う魅力あるまちとなっていること

政策の方向性

(1) 地域資源の活用・ブランディング

①ホタルイカ

【現状・課題】

- ・滑川産のホタルイカは、毎日数トンという量を出荷していても、高級スーパーですら手が出せないレベルの値段であることも多く、なかなか東京の高級スーパーにも並ばない。
- ・ほたるいか海上観光は出航率が5～6割であることが課題。折角、県外や国外から来ても、ホタルイカを観ることができない人がいる。
- ・ホタルイカはシーズンが限られており、シーズン外のほたるいかミュージアムや滑川市のブランディングはどうするのかということが問題。ホタルイカだけにブランドを絞ることはリスクがある。
- ・行政主導ではなく、民間主導でホタルイカに集中していけば、エリアを問わず広がっていくことができる。

【施策の方向性】

○ブランド化

- ・ホタルイカに特化することが良いか悪いかは別にして、富山県中でホタルイカが獲れるにも関わらず、3月末になると滑川のホタルイカは注目される。これは滑川市を「ホタルイカの町」として育ててくれた先人たちのおかげであり、滑川市の強みである。
- ・東京のスーパーで見かけるホタルイカの9割は兵庫県産。東京などの大都市に対して、滑川のホタルイカの名前を売った方が、観光客などに対するブランディングとしては良い。富山県のホタルイカは高級ラインになっているので、紀伊國屋やクイーンズ伊勢丹などの高級スーパーなどに売ることを考えるべき。
- ・富山県のホタルイカの一番素晴らしい点は、サスティナブルな食材であること。限りある資源を無駄にせず、産卵を終えて死にゆくホタルイカだけを定置網で獲るというサスティナブルなところは、滑川の売りになる。ストーリーとして発信していくべき。

○ホタルイカと子どもたち

- ・小学生には、滑川市にはホタルイカという素晴らしい資源があるということを知ってから、将来、全国に出てほしい。
- ・漁師の成り手不足の問題もある。漁師になってくれる若者を育てるという意味

でも、ホタルイカについて発信していく意味がある。

- ・滑川市には子どもや、親子で一緒に楽しめるようなものが少ない。地引網体験のような、一緒に楽しめるようなものがあれば、若い世代も参加したいと思うはずである。
- ・ホタルイカ漁の垣網（ホタルイカを誘導する網）という藁（わら）の網について、市民参加型の網づくり体験は、実施すべき。藁の網がサスティナブルに海に落とされているというのは立派なストーリー。しかし、滑川では、網は市外で作られており、製作の様子も知らなければ、その藁がどこから来ているのかも知られていない。

「ホタルイカ」が滑川市にとって一番大きな地域資源である。これをもっと活用しない手はない。例えば、「ホタルイカの身投げ予報」を出して、日頃からホタルイカをPRしてはどうか。言葉のインパクトが必要
ホタルイカの急速冷凍施設もあるので施設の稼働を上げて、生のホタルイカをふるさと納税の返礼品として出せるといい。

②海洋深層水

【現状・課題】

- ・深層水体験施設タラソピアは、利用者数がピーク時の約3割に落ち込み、市の財政負担も大きかった。その後、施設の老朽化が進み、天井が落下したことから、閉館とした。施設整備とともに塩害による老朽化が著しく、躯体自体も利用できるかどうか不明。
- ・深層水分水施設アクアポケットにおいても、設備の老朽化により、新しい設備に更新する必要がある。
- ・深層水天日塩は、天日で深層水を蒸発させる製法であり、市職員自身が製造を行っていることから、製造量に限界がある。

【施策の方向性】

○海洋深層水の商品化・活用方法

- ・海洋深層水天日塩は、能登の塩など他の地域のものとも差別化していく必要がある。パッケージを良いものにすることが大事である。また、ブランド化、販売量の拡大の観点から、施設の民間移管を検討すべき。
- ・海洋深層水は3～4℃なので、サウナ後に身体を冷やすために活用したテントサウナイベントが開催された。今のサウナブームに乗るのも一つの手である。
- ・海洋深層水は全国的に見ても珍しく、どこにでもある資源ではない。それを活かして、今の時代に合った商品化を行う必要がある。

○深層水体験施設タラソピアなど老朽化した公共施設のあり方

- ・ブランディングも大事であるが、デッドライン（施設・設備の老朽化による限界）が決まっているタラソピアとアクアポケットをどうするかを決めることが大事。その他にも中山間地域にある宿泊研修施設の青雲閣やみのわ温泉など、40～50年以上前からある施設の老朽化も進んでいる。公の施設について、「何をやるか」、「どう活用するか。面白いものにできないか。」など検討すべき。
- ・民間や若い人たちの力を活用すべき。タラソピアの廃止後の活用（新築も含む）については、思い切って若い起業家に任せるべき。
- ・ほたるいかにミュージアムのVRホタルイカは、技術的にとても難しいことを実

験しているので、一回体験して終わりでは勿体ない。さらに、実施結果をふまえ、開発を続けるべき。という技術を使っているのかなどを教えるような催しがあれば面白いと思う。

- ・ タラソピアの廃止後の活用方法の検討にあたっては、滑川市の観光拠点として、周辺のほたるいかミュージアム、レストラン光彩、売店、はまなす公園などと一体的に検討することが必要。

滑川漁港周辺エリア一帯の観光資源（ホタルイカや紅ズワイガニを活用し、海浜公園でのキャンプやダイビングスポット、ホタルイカミュージアム、足湯）を関係性を持たせながら楽しんでもらえるエリアにしていくか。また、そこと瀬羽町の通りをつないでいく仕掛けが必要。

ほたるいかミュージアム、市内中心部にある行田公園、瀬羽町など点在している資源を点でなく線で結べるような仕掛けが必要である。その案としてレンタサイクルやコミバスの運行方法の変更などを検討しては。

深層水のミネラル分と酵素を掛け合わせると腸にすごくいい。ヘルスツーリズムで発信できる。

（２）ブランド作り、ブランド発信力の強化

【現状・課題】

- ・ 滑川市民は滑川市のことを褒めない。まず、そこを意識改革していかないといけない。
- ・ 滑川市には魅力が「ある」のに発信されておらず、みんなに伝わっていないものが多い。
- ・ 滑川市は道路がとても分かりにくい。市で作成しているマップも古いので、もう少し分かりやすく、若者受けするような感じで作成する方がよい。
- ・ 若者に、滑川の良さを知らせることが大事。直ぐに芽が出なくても、転職などの機会に滑川市を思い出してもらえるように、10年先の種を蒔いておくような仕掛けが大事だと思う。

【施策の方向性】

- ・ 地域ブランドは、地域経済を活性化していくために必要。「外貨を稼いで地域内で循環させていこう」という話である。
- ・ 「ブランディング」（ブランドを発信し続けること）には1. 自分が伝えたいコトを固める、2. 誰に伝えたいか決める、3. なぜ伝えたいのか把握する、4. どこで、いつ、どのように伝えるか、5. ずっと続けるという必要なステップがある。
1番から3番が大事な部分であり、特に3番目がビジョンに関わってくるところになる。何故それをやりたいのかを固めて共有するから、一つの方向に向かって行くことができる。
- ・ 特産品を作る場合は、「現状の課題共有」、「ブランドの定義を共有」から、「主体性のある事業体の構成」、「技術、素材、販路の可視化」へと順にステップを踏み、継続したものしていく必要がある。
- ・ 大都市の人からすると、魚津市も入善町も朝日町も知らない町であり、どちら

の方が良いかはあまり関係が無い。

このため、滑川市のことは勿論考えるが、滑川市の周辺のことでも儲かるように考える。矛盾するようだが、「みんなのために」と考えることが、結果として儲けること繋がる。大きな価値観で取り組むことが必要。

- ・ 行政が行うブランディングには課題がある。行政には「すべてに対して平等に接したい」という思いがある。ブランディングは突き詰めてしまうと、やらないことを決めなければいけなくなるが、行政はその守備範囲を決めるのが非常に苦手である。民間主導で実施すべきである。
- ・ 地域に住んでいる方と地域外の方との観点にはいい意味で違いがあるので、観光やブランディングは富山県内で話を完結させず外からの目線が必要だ。
- ・ ホタルイカ・海洋深層水に関しては今後も拘りながら、新たな地域資源の議論も必要である。
- ・ 「すべらない街 滑川」というフレーズはインパクトがある。キャッチコピーにユーモアがある。滑川市の認知度アップにつながる。例えば、すべらない神社みたいに、落ちないとか、合格するということでも使える。
- ・ ホタルイカ以外にもブランドを育てるという点について、滑川のベニズワイガニがすごく美味しい。滑川産は半日で操業し漁師自らが茹でて選別して流通させているところが特色である。流通量が多いため新湊産や魚津産が有名だが、安くて美味しいという所をもっと発信すべき。
- ・ 滑川市は人口はゆるやかに減少しているが世帯数は増えており、市が実施している施策効果の結果と言える。こういった点をアピールすることもブランディングの一つの方法である。

2 まちづくりと、交流・関係人口の拡大

目指すべき姿

- ・ 若者、女性、シニア層などが、住み続けたい、訪れてみたいと思える地域づくりが進み、魅力的な人が集まるとともに、それらの人がさらに人を呼び込み、魅力ある地域となっていること
- ・ 首都圏等の企業のサテライトオフィス等の移転設置が進んでいること

政策の方向性

(1) まちづくり

①北国街道の宿場町（瀬羽町等）の活用

【現状・課題】

- ・ 瀬羽町は、かつて多くの人が行き交い賑わっていたが、10年前頃は衰退したまちとなっていた。しかし、近年、旧宮崎酒造など登録文化財の改修、ベトナムランタン祭などのイベント、喫茶店・飲食店の空き店舗への立地が進み、少しずつだが人通りが出てきた。
- ・ こうした動きは、良く言えばイノベーティブな感じだが、その一方で当時良かった景観がなくなってきたというような印象も受けている。

- ・ 行政や団体が入ってしまうと、カオスであるが故に魅力的な部分が秩序立っていき、魅力が失われてしまうこともある。現状の誰も仕切っていない、みんながのびのびと自由にしている面も大切にしたい。
- ・ 人通りが少しずつ増えてきており、駐車場が無いという状況は問題。近隣の人たちとの軋轢を生む可能性がある。

【施策の方向性】

- 旧宿場町はどこにでもあり、みんな同じ社会課題があって、何とかしようとしているが、その中でも可能性があると感じた。結局は、まちづくりを「誰がやるのか」というところが大事である。10年くらいかけて行う目線でやると良い。
- ・ 旧町部には、県内最大級の米騒動が起こったという歴史や由緒のある国登録有形文化財、ランドスケープとなり得る河川など、今後のまちづくりを進めるうえでの地域資源が豊富にある。
エリアや町並み全体として目指している姿を決めて、それに沿った形で、公民連携により自由なまちづくりをしていく方法が良い。
 - ・ 法律や条例で縛るのではなく、コンセプトとして精神的に共有されている状態をつくるべき。
 - ・ 滑川に来る理由が1個でも増えるのは良いことなので、町並みでも個別の店でも、目的や順番はどちらでも良い。ただ、せっかく滑川まで来てもらったのだから、他にもお金が落ちる流れをつくることのできたら良いと思う。
 - ・ 滑川市を愛しているという気持ちを表すのであれば、市民が良いと思った事業に対して寄附ができる「市民基金」を作るべき。その財源はファンドレイザーなどに委託して、増やししながら事業に使っていくことを提案する。
 - ・ 古い町並みは日本中にあるので、瀬羽町だけが特別ではない。ただ、行政と地域の方、地主とオーナーとテナントなどが上手くいっていないことが多い。瀬羽町は比較的それが少なく、自発的に色々なことをやっていたりこうとする人たちの繋がりがあるところに凄く可能性を感じる。
 - ・ 瀬羽町に1件くらい、市が創業支援の一環として、短期間で貸し出す場所があっても良いと思う。お客さんがつけば、そのまま瀬羽町に物件を借りて出店してくれるのではないか。「滑川市に店を持つ」という選択肢を、もっとリアリティを持って考えてもらえたら、良い創業支援になると思う。

②海・山の自然景観

【現状・課題】

- ・ 海岸では、寄り回り波への対策として高い堤防が築かれているが、その堤防を超えれば、富山湾が一望できる。特に夕方には、夕陽が富山湾に沈む景色が大変綺麗に見える。
- ・ 滑川漁港や「ほたるいかミュージアム」の奥にある海岸周辺は、夕日が海に沈んでいく景色など富山湾が一望でき、観光客にとってはとても貴重な風景である。
- ・ 中山間では、眼下に広がる早月川扇状地が広がり、西側の富山市方面、東側の新川地域の平野が見渡せる。さらには氷見市から朝日町に至る海岸線やその先の富山湾が一望できる。
特に、夜間は星や夜景が綺麗で、県内トップクラスの圧巻の景観を見ることが

できる。

- ・ 滑川市内から見る剣岳など立山連峰の景色は、山岳景観の素晴らしい富山県の中にあってもトップクラスである。

【施策の方向性】

- ・ 海岸に高い堤防があり、遠くまで海が見えない。その堤防による視界の遮断を失くすことができれば、ビュースポットとなる。
地域の景観について考える時は、「観光客が来た時に、何に感動したか」という視点が重要である。地元の人には見慣れた風景であるので、何が面白いのかが分からなくなってしまうている。他人目線で面白いところを掘り返すことは是非やるべきである。
- ・ コロナ禍では一日中部屋に籠って作業していることがある。そういった時に、海を見ながら一日中テレワークやオンライン会議ができる場所があれば良い。

山と海が近く、コンパクトなまちであるからこそ、自然を満喫できる仕掛けが必要。

自然は、放置してはいけない。特に行田公園はしっかりと手をかけて、児童館と絡めて散策エリアにし、まちの奥座敷（ほっとできる場所）として整備いくべき。

高岡の歌の森公園のように眺望のいい公園にカフェを併設し、大人はカフェで休憩、子どもが公園で遊べる、といった場所があるといい。

（２）公共交通の活用

【現状・課題】

- ・ 鉄道としては、「あいの風とやま鉄道」が富山市方面、魚津市方面を、「富山地方鉄道」が、県東部を結ぶ鉄道として、富山市方面、立山・上市方面、魚津・黒部宇奈月方面を結んでいる。
- ・ バスとしては、「富山地方鉄道」が、富山駅と滑川駅間を結んでいる。
- ・ このほか、滑川市が運行しているコミュニティバスが、上記交通期間と接続し、滑川市内を運行している。
- ・ 通勤・通学者や高齢者の方々に利用されているが、利用者数は年々減少してきている。特にバスの利用者数が少なくなっている。

【施策の方向性】

○魅力スポットへの移動方法

- ・ 滑川市は市内の各スポットと駅などが遠い。LUUP（電動キックボード、電動アシスト自転車のシェアリングサービス）、電気自動車、セグウェイなどの今の時代に合った先進的な移動手段を導入すれば、それを面白いと感じた人が滑川に来るきっかけになる。
- ・ 今年度富山県立大で自動運転のレベル4の実証実験が行われた。まだ実験段階であるが、話題性もある。自動運転実装の場に滑川市を提供することも面白い。
- ・ 地域のキーマンに申し込めば滑川市のディープなところを案内してもらえ

ようになると良い。

○コミュニティバスの運用の工夫

- ・ コミュニティバスはやはり利用しにくい。バス停の場所と頻度が原因だと思う。この2点を上手くクリアすべき。
- ・ コミュニティバスをもっと積極的に活用すべき。通学や習い事での活用、公共施設の利用促進、働いている保護者の負担軽減や、観光の利便性向上など。イベントなどを通じてコミュニティバスに乗る経験を増やす取り組みをするべき。
- ・ 子どもたちは目的地ありきである。直ぐに目的地に行きたいと思っているので、何処かに寄るともう嫌になってしまう。学校から真っ直ぐ児童館などに行くことを考えるべき。

また、コミュニティバスの乗車時間中を楽しませる方法を考えるべき。

- ・ 利用促進のために、利用者目線で運行ルートや時間帯をもう少し工夫すべき。子どもの頃からバスに乗る経験は大事だと思うので、子どもたちが使いやすい時間に増便するところから始めると良い。

西滑川駅から滑川高校まででも、ゆっくり歩くと10分くらいかかる。そこに丁度良くバスが来たら良い。

- ・ コミュニティバスの採算性を確保することは難しいが、バスへの広告やバス停の命名権など検討する方法もある。
- ・ 車通勤なのでバスの乗り方が分からない。分からないから使わないという人もいるのではないか。
- ・ コミュニティバスを子どもたちに使ってもらえば良いのではないか。バスの中では子どもたちが興味を持つようなものを流し続け、児童館や博物館、ほたるいミュージアムなどの降ろすスポットを設けつつも、バスの中にずっと居ても面白いというような仕掛けを創れば良いと思う。

他市と比較するとコミバスの運行形態が利用しづらい。もっと充実させれば利用者が増加する。旧町部から中山間地域の往来を増やし、まちづくりに繋げる。

○コミュニティバスへのデジタル技術等の活用

- ・ バス停の近くに人がいるかななどをデジタル技術で測定し判断ができれば、人がいないバス停を通過することも可能になり、利便性が高まる。
- ・ 朝日町では博報堂とスズキ自動車とともに、バス路線を廃止したところに「ノッカル」というデマンド交通サービスを実施しており、滑川市でも検討すべき。

(3) 交流・関係人口の拡大

【現状・課題】

- ・ 滑川市では、交流・関係人口の拡大に向け、これまで「ふるさと納税」に取り組んできたが、申込みが伸びず、全国的に少ない富山県の中においても、下位に位置している。
- ・ 令和4年度から、「ミライノミカタ」という事業（滑川市の空き家を活用した短期間の居住体験・滑川市への提言を行う事業）を実施し、4名の意欲的な参加者があり、滑川市内での活動（滑川市のPR、コミュニティづくり、大学生との連携等）を市民と共に実施いただいた。
- ・ 令和5年度は、「ミライノミカタ」の継続に加え、市外の方が持つ高い能力や意欲、滑川市内での活動計画が魅力的なまちづくりに寄与すると市が判断した場

合に「なめりかわアンバサダー」と認定し、市内での活動の支援を行うと共に、地域おこし協力隊員の募集を行うこととしている。

【施策の方向性】

○交流・関係人口と地域づくり

- ・ 交流・関係人口を拡大することは、滑川市を面白いと感じた県外・市外の方々が、必ずしも移住しなくても、滑川市を一つの活動拠点として選んでいただき、市民と一緒に地域づくりに取り組んでいただくことに意味がある。行政はきっかけを作る、そして民間の取組みを応援する立場として実施していく。
- ・ 交流人口で大事なことはマインドシェアだと思う。全国の人たちの心の中に、滑川市のシェアをどれだけ取ることができるかということで、そのために何ができるのかを考えていく必要がある。何か一つの施策で上手くいくことはないと思うので、色々な施策を駆使しながらいくと良い。
- ・ 駅に撫でやすいサイズのキラリンやピッカの銅像を置いてはどうか。マスコットに恋が叶う、願いが叶うなどの意味で色づけをすれば学生は SNS で発信し、滑川の印象を広げることにつながると思う。
- ・ 「街ガチャ」というご当地にゆかりのある物や場所をキーホルダーにしたカプセルトイが全国各地で販売され売れている。市民も知らないが価値のある場所等を入れることで来訪意欲を刺激したり価値付けができたりする。銅像より単価が安いので取り組みやすいと思われる。
- ・ 学生が行政に関わる機会は、限りなく少ない。大学生は他県出身者も多く時間もある。そこで、こうした大学生をターゲットにし、繋がりを持つ方法もある。
- ・ 生まれ育った地域に何かしらの形で戻りたいと感じても、家族や仕事などの問題もあり、移住はハードルが高い。一方で、リモートの時代なので「副業」という形で何かすることは可能である。メリットがあれば、興味を持ってくれる人が増える。
- ・ 今はネットでも繋がれる時代。そのため、極端な話をすると、大学への進学等の際、滑川市から出ていった方が、滑川市に戻って来なくても良いのではないか。問題なのは、関係が切れてしまうこと。滑川在住者だけではなく外側からも様々な形で滑川市を応援してくれるような、ネットワークを作れば良い。
- ・ 富山県の SCOP TOYAMA（創業支援センター/創業・移住促進住宅）には、富山県で何かをしたいと思っている県内外の方々が入っているので、ここに各市町村が営業に行っても良いのではないか。SCOP TOYAMA で、市長や副市長、地域のエースの方などが滑川市の魅力を語ることで、滑川で活動する方の確保に繋がる。

市内の回遊性を高め、少し長めに滞在してもらえような工夫を。外国人観光客を取り込むこと視野に入れる。(外国人ガイド養成、子どもたちにも気楽に外国人と接する機会を)。

○空き家等を活用した滞在拠点の設置

- ・ 古民家活用と言うと移住や長期滞在のイメージが強いと思うが、もっと流動的に短期間だけでも、滑川市に触れられる拠点を設けるのが良い。滑川市内には宿自体も少ないが、ある一定の短期間だけ住むことができるような場所もない。1泊2日や2泊3日くらいの短期間で滑川市に触れる人たちの数を増やす

というのも、関係人口において重要である。

- ・泊まることができる気軽なコミュニティの場を、滑川市にも古民家を活用して作れば良い。また、そこを多拠点生活のサブスクのサイトに登録しておくことで、少ない選択肢の中に潜り込むことができる。
- ・市で借り上げている空き家を民間事業者の短期宿泊施設として利用できれば、滑川市内の事業者には空き家の状況をよく知ってもらえるし、市外から人を招いた研修活動とかを開いてもらいやすくなる。
- ・旅好きな人の場合、宿泊場所はホテルではなく一軒家を探す。Airbnb（エアビーアンドビー）のような宿泊サイトに滑川市内の宿は1軒も載っていない。滑川市を目的としていなくても泊まる場所があれば来る理由になる。

○イベントの開催・コミュニティの創出

- ・行政の企画も有難いが、もう少し民間の中で動いていく機運があったら良い。どうしたら民間の人たちが各々で企画するような町になるかを考えた方が、外の人が情報を得て来てくれるきっかけになる。
- ・52個くらいイベントをすれば、週1回何かのイベントがあることになる。そこで人と人が自然と触れ合うような場所ができると良い。
- ・イベントをやりたいという人はいっぱい居るので、メリカなどでイベントができるスペースを貸してもらえたら良い。
- ・収穫祭ということでバーベキューなどもやってみたいが、場所がないというのがネックになっている。駐車場やトイレの問題などもある。
4月29日にメリカの芝生広場で「滑川ソーシャルバーベキュー」を開催予定。「ソーシャルバーベキュー」というネーミングもいいので、これを滑川オリジナルで発信していくのも面白い。
- ・市外や県外の人が価値を見出していてくれるが、滑川市民は滑川市のものを珍重しない傾向がある。滑川市民の意識を醸成していくことも必要。
- ・「市長と語らんまいけ・東京版」や「大阪版」を実施してはどうか。関係人口の拡大と言うと来てもらうことを考えがちであるが、こちらから出向いて行くことがあっても良い。

○ミライノミカタ（滑川市の空き家を活用した短期間の居住体験）

- ・滑川市の事業である「ミライノミカタ」は、関係人口を県外に求めているが、県内の方も対象としてもいい。
- ・ミライノミカタの参加者と商品開発をしている。町の中に新しい空気と、新しいアイデアが生まれて、商品が生まれてきている。
- ・ミライノミカタの参加者の企画したコミュニティでは同世代の人たちが集っている。これは民間がやっているところに入るから楽しいのであって、行政が云々されても敷居が高い。企画してくれることは嬉しいが、その先は民間が勝手にやっている状態があつてこそそのコミュニティだと思う。

○地域おこし協力隊員の確保

- ・目的をもっとシャープにした方が、滑川市と全く接点がない人にとっては明確で、参加してもらえるのではないかな。
- ・他市の地域おこし協力隊員からは、市や県から「これをやってください」と言われることは基本的に雑用のようなもので、「僕たちはこれをやりたくて町に来たんじゃない」という話を聞く。地域おこし協力隊員の方に、やりたいことを提案してもらい、それを実現していくような形にした方が良いのではない

か。

○ふるさと納税の活用

- ・ 世帯年収 1,000 万から 2,000 万円の世帯が多い首都圏の自治体で、ふるさと納税流出額が多いという特徴があると感じている。この世帯の人たちを関係人口のターゲットにして返礼品を考えてはどうか。こうした人たちに刺さるのではないか。
- ・ ふるさと納税の場合は出口が全国であり、かつ、目を皿のようにして探している人たちが居る。地域の商材を上げていくことができるので、仕事を創るという面で見ても可能性はあると思う。
- ・ 魅力的な返礼品の掘り起こしや開発と共に、花火大会の有料観覧席など体験型の返礼品を開発することも大事である。アイデア次第で数に限りはなく、来訪のきっかけにもつながる。
- ・ ふるさと納税として、ホタルイカの体験価値を上げるようなものがあったとしても良いと思う。ホタルイカ漁を間近で体験して、ホタルイカを食べて、更に良いところに泊まることのできるようなパッケージがあると良い。また、有名なレストランやオーベルジュと提携して、ホタルイカづくりのコースを創ってもらえば、それを目当てに全国から人が来ると思う。
- ・ 本社が滑川市にない大手の会社もあるので、企業版ふるさと納税で巻き込むのも一つの方法である。

3 農林水産業・商工業・創業支援

目指すべき姿

- ・ 農林水産業が、DX の進展による効率化、生産物の高付加価値化、販路開拓が進むとともに、後継者が確保され、持続可能な生産体制が構築されていること
- ・ 企業・事業者の活動が、DX の進展、地域課題のビジネスへの活用により、業務の効率化、商品・サービスの開発が進むとともに、地域で稼いだお金が地域で回る、持続可能な地域経済が形成されていること

政策の方向性

(1) 水産業

【現状・課題】

- ・ 3月～新鮮な6月に、産卵のために滑川沖に群遊するホタルイカをはじめ、ベニズワイガニなど、定置網漁を中心に、新鮮な魚介類が水揚げされている。
- ・ しかし、地元では、一級品があまり消費されていない。また、漁港で、新鮮な魚介類を食べるための場所がない。
- ・ 有名な水産地に行っても美味しいものを食べられないのは、滑川市だけの話ではない。一級品は県外に出した方が高く売れるためである。
地域の中で一級品を出すということを意図的にやってこなかった結果、既に人

が来ない地域になっているのではないかという懸念がある。

- ・ 第一次産業である「水産業」だけでなく、加工事業、販売事業者、さらには消費者も含め、すべて盛り上げていくことは課題である。

【施策の方向性】

○水産業の振興

- ・ ホタルイカ、ベニズワイガニなど、出来が良い物は中央で売ってしまう傾向が強い。ふるさと納税で需要があるのは良いことだが、滑川市に来て食べたら一番美味しいという仕掛けを創る必要がある。
このため、各課横断的に考えるような仕組みを創り、そこに漁業者、加工事業者など関係事業者、市民を巻き込んで取り組むべき。
- ・ 一点に集中投下するというのは、差別化戦略として凄く大事。
収穫祭的なものを意識的にやっていくと良いのではないか。単発のイベントよりも、併せて食べ方やライフスタイルの提案をしていった方が良い。飲食店を個別に支援したり、創業支援したりするのでは限界がある。
- ・ 滑川高校には海洋科がある。水産業に結構力が入っているので、有効活用すれば良いのではないか。高校生ともっと連携していくことが良いのではないか。

○ホタルイカ

- ・ 「滑川＝ホタルイカ」というのは強烈なコンテンツなので、環境教育、食材、まちおこしなど、多面的に活用したいところである。
- ・ ホタルイカという出力をするテーマが決まっているのであれば、縦割りではなくホタルイカに関する全部の課が集まって話し合った上で、一緒に事業を創っていくことが大事なのではないか。
- ・ 「ホタルイカ課」という課を設立すれば、それだけでニュースになる。そこが観光・水産業・加工・販売から、エコ教育などまでを一元化して、まちおこしする方法がある。

（２）農林業

【現状・課題】

- ・ コシヒカリなど米の生産を基本に、大豆や大麦といった穀物、サトイモ、白ネギといった園芸作物を適当に組み合わせ、水田の高度利用を図っている。
- ・ 海洋深層水を活用したトマト栽培も行っている。
- ・ しかしながら、滑川市の農産物はなかなかスーパーでは手に入らないように、これといって滑川市の特産というものがない。

【施策の方向性】

○農林業の振興

- ・ 現在のようにSNSやインターネットによる販路開拓、新たにオープン予定の中滑川複合施設メリカでのイベント実施、そこに入る予定の「ひかる市」での販売など、市内外の人に知ってもらう機会をつくっていくことが必要。
- ・ 後継者がいない場合には、大規模農業法人を設立してまとめていく方法がある

が、小規模な生産者はJAに属してないことも多いので、情報へのアプローチがない。そこに対するフォローも必要である。

- ・ 農林水産業などは、基本的には「自助」で実施すべき。あまり「公助」の方で助けられない方が良くもあると思うので、バランス感覚が大事である。
行政は、補助金を拡充すれば良いというのではなく、もう少し違う方向のアプローチを考えた方が良いのではないかな。

平地にある耕作放棄地を児童生徒が自由に利用できたり、農家じゃない一般の人がチャレンジ農園のような形で利用できるといい。また、農泊体験として活用できるといい。

○地域の食材を活用したレストラン

- ・ ベッドタウンで子育て世帯が多いという滑川市の特徴は暫く続くと思う。子育て世帯が行けるような店を、行政が意識的に支援していくというプロデュースの仕方もあるのではないかな。
- ・ 良いレストランを地域に誘致できるかは凄く大事。レストランは「文化を編集する場所」である。

エース級の人を上手く探してきて、地域の食材を思い切り使った料理を作ってもらおう。「地域の資産を天才に編集してもらおう」ことによって、日本中からお金をもった影響力のあるグルメを集めることができる。

春ホタルイカ、夏カキ、秋イカ、冬カニ、それらに地元の農作物を使った食事を提供する屋台村があると良い。

（３）商工業・創業支援

【現状・課題】

- ・ 滑川市は、県内有数の工業のまちであり、大手製造業の企業の工場が多く立地している。これまで市では、工業団地の造成・企業誘致を行うとともに、これらの企業の設備投資に対し支援してきた。
- ・ 一方で、郊外型商業施設の立地はあるものの、地元資本の商業、飲食業、ホテル業、サービス業などは少なく、かつての中心商店街は衰退している。

【施策の方向性】

○商業支援

- ・ 滑川市は、地元の商店、飲食店が少ない。こうした事業者に対する支援を拡充していく必要がある。
- ・ 滑川市のスーパーは、何処に行っても置いてあるものはあまり変わらない。今はアレルギーの子どもたちが増えているので、アレルギーに特化した商品を陳列するとか、地域の農家の商品を積極的に卸していくなど、町に住んでいる人が買いたくなる商品が、手の届く範囲にあることが大事だと思う。
- ・ 旧町部に空き家が多く存在するが、逆に空き家活用で食や遊びを街中に集約できるのは滑川の魅力となる。

あらゆる産業に売薬の先用後利の手法を活用すれば、どこにもない取組みとなる。

○工業支援

- ・ 企業がたくさんあるので、「人の取り合い」が生じている。滑川市内の企業では、市内在住労働者は大体3割から4割くらいである。行政は就業支援などについて、弾力的にフォローする必要がある。
- ・ これからの工業は、中長期的にみると、自動化とAI化が進み、人がいなくても良いという状態になる。それを見据えた対策が必要になってくる。
- ・ 富山県内の製造業でもセンサーなどをつけてデータを取り、効率化を進めている。将来的に効率化できた部分については人が減っていくと思うが、完全に人がゼロになる訳ではない。社内にITベンダーのような立場の人材を取り入れていく、また生み出していけるような人材育成を進めていけば、製造業も更に発展するのではないか。
- ・ 富山県や滑川市に足りないのは幹部人材。これからの時代の製品を作って、世界に売り出すことができる力を持った人材などを、滑川市に呼び込む動きが必要である。
- ・ 成功している会社は自分が何業であるかについて規定がないと思う。行政も時代が変わっていることを考えながら、「業」という区分けで考え過ぎない方がよい。商業・工業・農業・水産業のいずれに該当するかよりも、世の中の変化にどのように対応できるのかが大事。「業」という区分けにむしろ嵌らない会社ほど伸びているので、如何にその枠外のことを創っていくのか、クリエイティブに考えるのか、それをサポートするのが大事だ。
旧金融機関は建物がしっかりしている。そこをサテライトオフィスにして貸し出してはどうか。

○創業支援

＜空き家活用に対する創業支援＞

- ・ どのような業種、どのようなスケールの人たちを入れ込みたいのかが分からない。現在は個人商店の方が空き家をリノベーションして、この補助金を活用している。行政としてはそれで良いのかを考えながら、補助金制度を検討する必要がある。
- ・ 大家の考え方をどのように変えていくかが大事。「賃貸料を年間50万円まで補助する」制度では、これまでと同じ家賃で貸しておけば補助金の分だけ自分が儲かると考えている大家では創業支援にはならない。大家の意識改革に対するアプローチも必要だ。
空き家オーナーのニーズ調査（賃貸や売買等）を行い、安価で提供できる空き家の情報を集約し、企業や外国人にアピールすることで人の流れを作れるのではないか。

＜創業時に必要な支援＞

▼金銭面の支援

- ・ 創業時に課題となるのはお金の部分。そういった部分の支援を、関係機関が連携し、創業者をフォローしていくことが大事だ。
- ・ 若くやる気に満ち溢れている人たちに対して、ビジネスの世界で成功した先輩たちが投資するという文化を創っていく必要がある。

▼制度面の支援

- ・ 起業するにはリスクがある。制度面においては、手続きなどの障壁を、関係機関が連携しフォローしていくことが大事だ。

- ・ 月額でコワーキングスペースに入居し、住所で登記すれば、郵便物もその住所に届くというサービスもある。制度面や手続きについては、民間で充分に対応できるものがあるので、起業者に情報提供していく仕組みが必要になる。

▼地域の支援

- ・ 起業しても社員がいなければ孤独を感じがちになるので、滑川市に起業家コミュニティをつくる必要がある。
- ・ 事業を成り立たせるためには、ある程度の集客が見込める状態であることが必要。すでに盛り上がっている場所については、もっと人が集まるよう盛り上げていくことができれば、滑川市で創業しようという人が増える。
- ・ 事業承継者には、今までのものを守るために攻めていかなければいけないという場面があるが、創業者は最初から攻めの姿勢でいかなければいけない。事業承継者については、その守る部分を行政や既存企業でフォローし、後ろ盾になるような仕組みができると、滑川市全体として良いと思う。
- ・ 創業者と、地域で何代も事業を営んでいる事業者が上手く混じると力を発揮する。お互いに、コンプレックスでもあり、かつ、リスペクトの対象でもあるところを、盗み合い学び合うというような場に滑川市がなっていくと、凄く力強いものになっていく。

▼テストマーケティングの場の設置

- ・ 中滑川複合施設メリカの1階にはカウンター付キッチンがある。飲食業での起業を考えている人に対して、その場所を貸し出すことになっている。起業者が小さなトライをして、実際に成功者が数多く出てくる場所にしていくことが大事だ。
- ・ 起業の失敗で多いのは、事業経営のことを良く分から方が、いきなり投資をし、出店してしまうこと。小さなトライができる場があることが、起業の成功確率を高めることに繋がる。

4 子育て支援と教育・人材育成

目指すべき姿

- ・ 教育の ICT 環境が整備され、個人個人の学習能力に応じた教育が提供されるとともに、ふるさとを愛する心の醸成、個人の能力を引き出す教育など、魅力的な教育が提供されていること

政策の方向性

(1) 妊娠・出産期・学童期の子育て支援

①妊娠・出産期の支援

【現状・課題】

- ・ 核家族化で家族や地域の繋がりが希薄になってきた。更にコロナ禍でコミュニケーションを取る機会も減っている。ワンオペ育児のお母さんたちも増え、子育てへの不安感や負担も増えているとの声が多い。

- ・ 女性が県外へ流出してしまうという問題の中で、「産むことを奨励する文化」という論点がある。これは、個々の人が自由な選択をすることができ、女性が必ずしも産むことを強制されないことが、逆説的に産みやすい環境をつくることになるのではないかとされており、滑川市においても、あてはまるのではないかと考えられる。

【施策の方向性】

- ・ 子育て時期前に、滑川市の子育て支援が充実しているということを知る機会があれば良い。
- ・ 無痛分娩を希望する女性は多いので、富山県内で無痛分娩ができる体制が整っていれば里帰り出産をする人が増えるのではないか。
- ・ 滑川市内に海や山などの景観を活かした産後ケア施設があれば良い。
- ・ 母子手帳アプリのように、携帯やスマホに通知が来るという仕組みが必要である。
- ・ 社会福祉協議会のファミリーサポート事業（地域の方に子どもを安価でみてもらえるサービス）や保育園の一時預かり事業などは、申請や面談などで実際に子どもを預けることができるようになるまでの期間が長い。プロセスの短縮化を図ることが大事だ。

出産する環境が必要、産婦人科医に来てもらう。また、シングルマザーの支援や病児保育に対応できる施設が必要。

障害児も一緒に育てられる保育環境の整備を。そこに高齢者や地域の人たちが関われる取り組みがあると良い。

②放課後児童クラブによる支援

【現状・課題】

- ・ 放課後児童クラブを利用するために、祖父母等の居住場所についてルールがある。昔は子どもを自分たちの親に預けることができたのかもしれないが、そのような昔の習慣や風習がそのまま残っているが故に、今の働き方や価値観とギャップが出てきている部分がある。
- ・ 放課後児童クラブに対する一番大きな不満は、宿題をさせてくれないということだった。

【施策の方向性】

- ・ 放課後児童クラブの運営方法については、現在の親世代との対話、支援員との対話を通じて、必要な改善を図っていく必要がある。
- ・ 放課後児童クラブのような福祉事業を行政が行うと、どうしても担っていただいている方の善意に頼ってしまうという現状がある。ある程度仕事としても成り立つような状況をつくっていく必要がある。
- ・ 子どもを連れて移住した人に、働きながら子どもを育ててもらうことを積極的にやっていくと良い。就業や住まいの斡旋を子育て支援に加えてやっていると、広がりが出ると思う。

保育、学童の現場は人手不足。高齢者が力を貸してくれると頼もしいが資格等の壁がある。育児サポート研修を受講すれば保育園でお手伝いいただくことが可能になる。行政でそういった制度をもっと周知して高齢者の活用を図るといい。

地域に子どもを安心して任せることができる身近な人が欲しい。核家族化、地域との関係の希薄化が進んでいるので、子どもが色々なタイプの大人と接する機会を増やすべき。

子育て中の親の意見を取り入れられるよう、市長と語る会ならぬ教育委員会と語る会があるといい。子どもの視点・立場に立った意見等が得られる場を。

（２）教育・人材育成

①ICT 教育

【現状・課題】

- ・ 小中高校生の児童生徒には、全員にタブレットが配布されている。
- ・ 小学生の理解度と先生の理解度はあまり変わらない。
- ・ 先生も子どもたちも使う人はどんどん使うようになってきている。今は過渡期にある。
- ・ 高校においては、現状として、タブレットはオンライン授業の時に使った程度で、あまり活用がされていない。自宅にも持ち帰っていないようである。
- ・ クラス全員でタブレットを開いたら固まって、授業が進まない。タブレットを使わない原因はそれもあると思う。

＜施策の方向性＞

○学校

- ・ 学校からタブレットを偶に家に持ち帰ってきてても、子どもは扱いきれていない。親子ともに慣れるためにも、もっと早い段階からICT教育を推進していけば良い。
- ・ タブレット端末は小さい子には重たい。そのうえ教科書等があるため負担となるので配慮が必要だ。
- ・ 学校に行かない子どもや学校に行けない子どももいるが、連絡用としてしか使われていない。オンライン授業とまではいかなくても、授業を撮影したものを振り返りとして活用できれば、学校に通っている子にとっては復習になるし、学校に行けない子のフォローもできる。
- ・ 夏休みの宿題などで、ある程度の強制力をもって子どもにタブレットを使わせるような環境を用意した方が良い。仕組みで変えていくということができれば、ICT教育は進むのではないか。
- ・ 市内の高校生と情報系の大学生の交流会があると、ICT 機器を用いた教育で今抱えている問題や、高校生からの率直な意見が聞けるのではないか。

○行政

ICT教育を進めるように言われているが、元々先生はデジタルネイティブではない。また、例年どおりにやることを求められている仕事もあり、ICT教育にしても英語教育にしても、更にプラスアルファを上積みさせられている状

況である。先生の仕事を減らすことを考えなければいけないし、仕事を減らさないのであれば行政としてもサポートしなければいけない。

- ・ プログラミング言語を使用せずにプログラムの考え方を身に着けることができる、先進的なアプリケーションを作っている会社もあるので、それらを活用して先生の負担を減らしてあげるように考えることが大事だ。
- ・ ICT教育やプログラミング教育については、地域の人々の協力が必要になってくる。まずは地域の人材を見つけていくというところも併せてやっていけば良いと思う。

○保護者

- ・ ICT教育を進めていく上で一番大事なことは周りの知識である。保護者がもっと気軽に、子どもが小さい時からタブレットなどを与えて、自分で何が良く何が悪いかを考えさせるような経験をさせると良い。それと同時に保護者は自分も知識をつけていくことが大事である。

②ふるさと教育

【現状・課題】

- ・ これまでも授業の中で、ふるさと教育、体験型教育に取り組んできたが、児童生徒が滑川市で育っていく過程で滑川市の良さを知ってもらい、子どもの感覚を伸ばすことが大事であり、今後とも、積極的な取り組みが必要である。

【施策の方向性】

○ふるさと教育

- ・ 親が「滑川市には何も無い」と言って子どもを外に出してしまうと、子どもはそう思って出て行ってしまう。親子で一緒にどれだけ感動する時間を与えることができるかということが大事だ。
- ・ 滑川市以外に触れる機会を増やすことで、自然と滑川市の良さに気づいてくれる。

殆どの地方のリーダーは自分の地域と東京しか知らないため、東京との比較で地域を語ることが多い。一方で、地方に来る人は他の地方を体験している人が多いので、サービスを受ける人の方が体験価値が高いということが良くある。地方は何処も自然がいっぱいで素晴らしく、水や空気が綺麗で、食事も美味しい。その中で相対的に自分たちの強みが何かを知るには、他地域に行くことが大事だ。

日医工の高層階から見る景色は市内を見渡せる。企業訪問などの体験活動を通して、小・中・高校生の時から、他市町村にはない良さを大人から子どもへ伝えていくべきである。

町内会に、小中学生の部を創設し、地域のきずな、人材育成に繋げてみてはどうか。

○ホタルイカの活用

子どもたちにはホタルイカの良さを知ってから全国に出ていってもらいたい。小学生の子どもたちをほたるいか海上観光の船に乗せたい。一番良いものを見せることが、子どもたちにとっても、ふるさと教育にとっても一番良い。

- ・ 進学や就職などで県外に行くと、絶対に出身地の話になる。ホタルイカは食べて美味しいだけではなく光って綺麗という話もしたいが、ほたるいか海上観光

を体験したことがないと話ができない。また、辛い時に地元を思い出す機会が必ずあるので、そういう時に、地元で強烈な思い出がどれだけあるかによって、地元愛が変わってくるのではないかな。

- ・ 滑川市のホタルイカや海洋資源は圧倒的な競争力があると思う。滑川市にずっといると価値が分からないかもしれないので、子どもの時からホタルイカの生態を知り、親と一緒に体験するという流れになると、地域としても非常に強みになる。

○農産物の活用

- ・ 意外と滑川でりんごが作られているということを知らない子が多い。色々な作物を作っている農家を知ってほしい。
- ・ 若い世代には食に興味が無い人が多い。学校で食育を推進しても、家では全然という方もいるので、家族で農業体験などの機会があれば良い。

いろんな場、コミュニティと世代間交流が非常に大事。子どもも高齢者もどちらも先生になれるし生徒にもなれる。そういった面白い大人との出会いが郷土愛の醸成につながり、大人になってからも故郷に関わりを持ち続けるきっかけとなる。

関わりは単発ではなく継続性が大事。農業体験や一緒に給食を食べたりする機会を増やしたりなど世代間のつながりが強くなる。

③キャリア教育

【現状・課題】

- ・ 本物に触れる瞬間を教室の中に創ることが大事だと思う。学校は 10 年後に社会に出て行く子どもたちを育てる場なので、企業の方などが学校の中に入って、先生として語り掛けて能力を高めるというところがポイントである。これは社会に開かれた教育課程ということで、今の学習指導要領の根幹になっている。
- ・ 滑川高校でも商業科は実際に販売実習などを行っているが、普通科は職業科に比べて地域に関わる時間が少ない。日程に組み込まれていないので、専門的なことなどは関わっていない。

【施策の方向性】

- ・ 起業家体験プログラムは、日本にとって非常に重要だ。
- ・ 将来のことを見据えると、大人や地域の人と関わる機会が増えていくので、学生のうちから触れる機会を増やしていくことが大事だ。
- ・ 地域の人が学校に入ってくる時に、教育というフォーマットに当て嵌めてしまうと動き辛くなってしまふところがある。行政には柔軟性を持った仕組みを検討してもらいたい。
- ・ 「失敗しても良い」という感覚を、子どものうちに持つことができるようなキャリア教育ができれば良いと思う。
- ・ 成功している人は、その過程が挫折の連続であったり、破滅的な失敗などを体験していたりする。「失敗はするもので、失敗を乗り越えていくことが大事である」ということを、子ども時代に見ることが凄く大事だ。

- ・ 保育園と小学校の間の分断、小学校と中学校の分断、中学校と高校の分断が、あると聞いている。過去にその子たちが何を受けてきたのかという情報交換が、ちゃんとできる体制があると良い。
 - ・ 社会の本物の課題に対し実践を通して探究力を鍛錬するとともに、異なる年齢の子どもたちが他の人の意見を重ね合わせ、共に創り上げる能力を学ぶことは重要である。
- 小中学生が会社経営などを学び、組織運営に携われる場やチャレンジショップの運営の場があると良い。

④生涯学習

【現状・課題】

- ・ 滑川市では、ふるさと市民大学など多くの生涯学習講座を実施している。民間でお金を払って受講できる講座も数多くあるので、行政で実施すべきかどうか検討が必要である。
- ・ 滑川市が開催している各講座の人気は差が激しい。ニーズを把握するなど、もう少し改善の余地がある。
- ・ 「人的投資が少ない」というところが日本の大きな課題となっているが、それ以上に諸外国に比べて、日本人は学ぶ意欲が極端に低い。「リスキリング (Reskilling)」ということが、国の方でも今大きなテーマになってきている。
- ・ 20～40代の働いている方が対象の講座が全くない状況である。

【施策の方向性】

○現在の講座の改善

- ・ 大人を対象とする講座は高齢者が多く、その中でもハードユーザーとそうでない方がいる。広く一般の方を掬い上げるような講座があれば良い。
- ・ 講座については、取捨選択していくことが大事。人気がないのであればやめるというもありだ。
- ・ 「受講した人が講師になる」という、ステップアップができるようなプログラムを創ることはできないか。

○リカレント教育

- ・ 今働いている方が持っている知識は古くなっており、アンラーニング (Unlearning) という学んできたことを捨てて、新しいものを自分でお金を払って取りに行かなければいけない。行政にできることがあるとすれば、自分でお金を払って受講することが難しい方などをサポートするために、必要な講座を開講することだと思う。

○行政で開講する必要性

- ・ 知識については、YouTubeなどで世界中のものを何処からでもオンラインで学ぶことができる。スマホやパソコンを活用すれば、オンラインの領域からは様々なことを学ぶことができるということを高齢者などにアドバイスする講座は良いと思うが、それ以外のところは無理に行政でやらなくて良いのではないか。
- ・ たくさんの行政課題がある中で、滑川市としてこの分野に思い入れが強くないのであれば、他の成長分野に集中した方が良いのではないか。

5 DX の推進

目指すべき姿

- ・ DX の進展により、まちの魅力、市民生活の満足度、行政サービスの利便性が無限大に高まっていること

政策の方向性

(1) 市民の DX

【現状・課題】

- ・ デジタルリテラシーの向上に努めるとともに、デジタル機器を利用できない方であっても、誰一人取り残されないよう、取り組むことが大事である。
- ・ 中小企業等の DX を支援し、生産性の向上のための支援を行う必要がある。
- ・ 子どもたちのデジタルスキルの向上に取り組むことが必要である。

【施策の方向性】

○デジタルリテラシーの向上

- ・ 高齢者スマホ教室への参加者は、スマホの利用などに対してポジティブに考えている方が多い。ICT 機器の利用に対してネガティブに考えている方々にどのようにして使ってもらうかの検討が必要だ。
- ・ 参加している高齢者の絶対数が少ない。まずはスマホで Web 会議ができるような状態にして教室ができれば、多くの方に参加いただけるのではないかな。
- ・ アドベンチャーや脳トレアプリなど高齢者が使っても面白いアプリはたくさんあるので、推奨していけば良い。
- ・ 滑川市は Wi-Fi の環境が悪い。通信環境が全体的に改善すれば良いと思う。

○子どもたちのデジタルスキルの向上

- ・ DX の流れは一過性のものではないので、10 年後に社会人として活躍する現在の小中高生のデジタルスキルの向上を図っていく。
- ・ 大人が苦しんでいる DX の高いハードルについて、子どもたちの視点を取り入れ、革新的なアイデアを募集していくことが大事だ。自分がやりたいことが、地域貢献・社会貢献、更に 10 年後の滑川市のためになるような視点を持つ機会を創っていけば良い。

○事業者の DX

- ・ キャッシュレス決済や e コマースの導入支援のほか、業務の効率化など中小企業、個人事業者等の DX を支援する。

(2) まちづくりの DX

【現状・課題】

- ・ 市民、民間事業者、大学、行政などが相互に連携し、様々なデータの収集・活用などにより、まちづくりに取り組む必要がある。

【施策の方向性】

- ・ センサーやカメラ等でデータを収集、分析し、防災対策など各種施策に活用する。
- ・ 町内会運営アプリ「結ネット」の導入促進にあたっては、ツールだけ用意しても、アカウントだけ作って利用しない人も多いと思う。ツールを利用する面白さや意味などを同時に用意することが大事だ。
- ・ モビリティサービスなど、デジタル技術を活用した新たなサービスの導入を検討する。

市内商店で利用できる電子マネー（（仮称）ホタルイカペイ）があっても良い。

（３）市役所の DX

【現状・課題】

- ・ DX の導入により、市役所業務の効率化を促進する必要がある。

【施策の方向性】

○滑川市職員の育成

- ・ 市役所職員が先端的な ICT 技術を使いこなすことができるようになれば、市民は後からついてくる。行政の内部から変えていくことが、DX に導入にあたって一番大事である。
- ・ DX 推進では、担い手のレベルと目線が高いことが重要である。
- ・ 富山県庁においても、将来、幹部職員として必ず富山県を担うだろうという若手から中堅のキーパーソンが、DX についての理解が非常に熱い必要があると考えて教育している。滑川市職員からも該当者を数名、一緒に勉強させてもらう機会を設ける方法もある。

○業務の見直し、効率化

- ・ 全業務を抽出分類し、その中でデジタル化できるものはデジタル化にし、正規職員でなくてもできる業務は、派遣職員にまかせることにより、正規職員の業務の圧縮を行う。その上で正規職員が本来行うべきクリエイティブな業務や市民の声を聴き市民サービスの向上につながる政策の企画に専念できるよう業務を見直す。

市役所から RPA システムを導入していくべき。

○ペーパーレス化

- ・ オンラインで済むところと、紙ベースの方が良いところは、まだ混在している状態である。一気に進めるよりも、みんなが少しずつ分かりやすい状態に入っていけると良い。
- ・ 紙に実際に書いた方が分かりやすい部分も確かにある。だから、「全部が紙」、「全部がデジタル」ではなく、どちらが良いのか着地点を考えながら、徐々にペーパーレス化を進めていく必要がある。

○申請手続き等のオンライン化

- ・ 現在オンラインでできることが一覧になっており、そこからオンライン申請などに入っていけるようなページをつくるべきだ。

- ・ 行政手続きが多言語化され、かつオンラインでできると良い。

○市民への情報発信

- ・ 滑川市公式 LINE で発信される情報に対して、返信や意見する仕組みがあり、それがオープンになっているだけでも、市民の情報リテラシーに対してのファン
ドが上がるので、ぜひ取り組むべき。
- ・ DX の取組内容とともに、デジタル技術を導入して変わった点など先進的な取
組みを実施していることをアピールしていくことが大事だ。

Ⅲ 今後の取組み

- ・ 報告書（案）は、滑川市まちづくり共創会議における意見を基に、新しい滑川の今後の大きな方向性についてまとめたものである。この報告書（案）を市民の皆さんにテーマごとに説明し、いろいろなアイデアを出してもらうことで、市民の声を基に更なる内容の充実を図るため「市民セッション」を実施する。
- ・ また、報告書（案）で示した大きな方向性を、滑川市の具体的な事業・プロジェクトとするためには、今後さらに、事業レベルでの検討を行う必要がある。
このため、滑川市まちづくり共創会議にテーマごとに具体的な施策などを検討する市民による「ワーキンググループ（WG）」を設置。併せて職員による「プロジェクトチーム（PT）」を設置。施策検討・市の事業化等に取り組む。
まずは、官民連携によるまちづくりや空き家の利活用等社会課題解決の推進を目的とした「まちづくりWG」、「まちづくりPT」を設置し、施策検討・市の事業化等に取り組む。その後、他のテーマに関わるWGを必要に応じ随時設置していく予定である。
- ・ 今後、ワーキンググループ（WG）や市民セッションにおける議論や提案等を踏まえ、本報告書に反映していきたい。
- ・ また、本報告書については、滑川市総合計画の改訂に反映させる。

〈今後のスケジュール〉

	まちづくり共創会議	ワーキンググループ（WG）	（参考） 第5次滑川市総合計画
10月	令和5年度第1回会議 ・ 将来ビジョン及び報告書（案）説明		
11月		市民による「まちづくりWG」を設置 市役所職員による「まちづくりPT」を設置	令和5年度第1回総合計画審議会 ・ 将来ビジョン、まちづくり共創会議の提言等を踏まえた総合計画等の改訂案提示
12月	市民セッション ・ 住民参加で将来ビジョン、報告書（案）について議論。テーマごとに2回開催。		
1月	職員セッション ・ 将来ビジョンについて滑川らしさと欠かすことのできないこと、将来ありたい姿を議論。 令和5年度第2回会議 ・ 市民セッション等の意見を踏まえ、報告書取りまとめ	随時開催 ※他のWGも必要に応じ設置	
2月			令和5年度第2回総合計画審議会 ・ 答申
3月			パブリックコメント
4月以降	まちづくり共創会議・WG・市民セッションでの議論や提案を踏まえ、報告書を随時改訂		市議会6月定例会 ・ 構想、基本計画議決

【参考】滑川市まちづくり共創会議

○設置目的

- ・ 現在から未来へと続く輝く滑川の実現に向け、滑川市の将来ビジョンや政策について、意欲のある市民の方々など対話を重ね、共に考える場として設置するもの。

○委員名簿

	氏 名	仕事、組織等
1	星名 照彦	ホシナグループ代表取締役、滑川商工会議所会頭
2	廣瀬 淳	株式会社公生社代表取締役
3	福井 信英	株式会社プロジェクトデザイン代表取締役
4	清水 義彦	富山県立大学教養教育センター准教授
5	土肥 薫	M a M a - n o 代表
6	石田 拓人	K E I Z O 倉庫代表
7	深井 あゆみ	深井農園（リンゴ、加工品）
8	樋口 幸男	一般社団法人ばいにゃこ村代表理事
9	桶川 高明	T R I O 代表
10	砂子 典章	有限会社カネツル砂子商店専務取締役
11	金川 奈那美	富山県立滑川高等学校
12	浦田 結那	富山県立滑川高等学校
13	長瀬 めぐみ	公募委員
14	由井 千尋	公募委員
15	山内 大河	公募委員

特別アドバイザー

藤野 英人	レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役
-------	------------------------

○令和4年度開催実績

- ・ 第1回 令和4年9月16日（金）
テーマ：地域資源の活用と地域のブランディング
- ・ 第2回 令和4年11月7日（月）
テーマ：子育て支援と教育・人材育成
- ・ 第3回 令和4年11月30日（水）
テーマ：農林水産業・商工業・創業支援
- ・ 第4回 令和4年12月19日（月）
テーマ：デジタル化とスマートシティ
- ・ 第5回 令和5年1月10日（火）
テーマ：交流・関係人口の拡大、滑川市の将来ビジョン（目指すべき姿）
- ・ 第6回 令和5年2月6日（月）
テーマ：中間報告（たたき台）

○令和5年度開催

- 第1回 令和5年10月16日（月）
テーマ：将来ビジョン及び報告書（案）
- 第2回 令和6年1月17日（水）
テーマ：最終報告案

